

薬学部

I	研究水準	研究 4-2
II	質の向上度	研究 4-3

I 研究水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

1. 研究活動の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「研究活動の実施状況」のうち、研究の実施状況については、平成 16 年度～平成 19 年度で審査付きの学術論文は、教員一名当たり年平均 2.41 件である。そのうち英文学術論文は、年平均 2.23 件で全体の 92%を占め、また、平成 16 年度から平成 19 年度までのインパクトファクター（IF）4 以上の論文数は合計 92 件であり、英文学術論文 339 件の 27%であった。研究資金の獲得状況については、受け入れ金額の各年度の総額は、1.4～2.0 億円、教員一名当たりの受け入れ額は、366～524 万円であり、外部資金による研究費獲得に対する努力が窺われることは、相応の成果である。

以上の点について、薬学部の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究活動の状況は、薬学部が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

2. 研究成果の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「研究成果の状況」について、学術面では、基礎的な有機化学の分野で卓越した業績がみられ、その他、相応に優れた業績と評価できるものも存在した。しかしながら、薬学は総合科学であるのに対して、卓越した業績と認められる業績が有機化学の研究のみで、今後の総合的発展が期待される。社会、経済、文化面では、徳島のすだちに血糖値抑制効果を見いだしていることが、注目され、事実新聞報道もなされていることは、相応な成果で

ある。

以上の点について、薬学部の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究成果の状況は、薬学部が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

II 質の向上度

1. 質の向上度

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

相応に改善、向上している

[判断理由]

「高い質（水準）を維持している」と判断された事例が 5 件、「相応に改善、向上している」と判断された事例が 6 件であった。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間終了時における判定として確定する。